



この一冊

Vol. 102

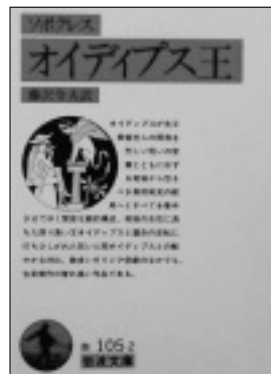


会員 菅野 茂徳 (41期) ●Shigenori Kanno

私の読書の仕方は、関心のあるテーマについて面白そうな本を事前に何冊か買い込んでおき、それらの本を一気に続けて読み進めていくというものです。こうすると頭の中には徐々にそのテーマに関する知識が蓄積され、後になる程読むスピードも速くなり、また各本(著者)の主張(言いたいこと)の関連性も理解しやすくなります。

ところで私の現在の趣味は、読書と美術鑑賞(特に絵画と焼き物、ともに洋の東西は問いません)ですが、西洋絵画を鑑賞するにはどうしても、キリスト教ともう1つ、ギリシャ神話に関する最低限の知識が必要になります。そんな訳で、前々から読もうと考えていたギリシャ神話に関する本をここ1、2年前から買い込み(読書に充てられる時間の大部分が通勤や出張の際の電車の中なので、いきおい買う本は小型軽量の文庫・新書になります)、半年程前から読み始めました。いつもそうですが、まず初めは当該テーマの入門書・概説書からということで『ギリシア神話』(高津春繁著・岩波新書)、次に私と同じ関心を示していたので『ギリシア神話を知っていますか』(阿刀田高著・新

『オイディプス王』



ソポクレス 著
藤沢 令夫 訳
岩波文庫
518円(税込)

潮文庫)、さらにギリシア神話小辞典とも言うべき(2冊あわせて800頁以上)『ギリシアの神話—神々の時代・英雄の時代』(K・ケレーニイ著・中公文庫)、ここで原典にもということで『ギリシア神話』(アポロドーロス・岩波文庫)。こんな具合に読み進めていくと、当初のテーマの周辺にも興味関心は広がっていきます。今回紹介する本の主人公オイディプスもギリシア神話の登場人物の1人ですが、人物そのものよりもギリシア悲劇とは何なのか、なぜ古代ギリシア人は劇という形を選択したのか、作者ソポクレスとはどんな人物でどんな

時代に活躍したのか、3大悲劇作家の他の2人(アイスキュロス・エウリピデス)の作品はどのようなものか等々。そんな訳でなかなか他のテーマの本にたどり着けないのが実情です。

さて、『オイディプス王』ですが、かのアリストテレスが「悲劇とはあわれみとおそれをひき起こすことによって、この種の諸感情の浄化(カタルシス)を達成するもの」と定義した「(ギリシア)悲劇」にぴったり当てはまる作品で、その具体的内容は、あのスフィンクスの謎を解きテバイの国を救ったコリントス王の息子(これが真実ではなかったことがミソ)で放浪中のオイディプスとその功によりテバイの前王(既に殺害されておりその殺人者がまたミソ)の前妃(前妃だけではないところもミソ)を娶るも、テバイに飢饉の災厄がふりかかり前王の殺害者を見つけ出すことが解決の途との神託を受け…ここで残念ながら紙数がほぼ尽きてしまいました。文庫で約100頁(それも余白多め)ですので是非手にとって原典に触れられることをお勧めします。 ■